
RE-LAND

夕焼け

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R E - L A N D

【Nコード】

N 9 4 8 3 C

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

渡瀬悠里。それが新しい僕の名前。僕はあの日僕の肉体と名前を失った。「僕」を拾ったのは狂気の男。その娘を演じることになった僕。くだらない三文芝居。けれどそれは行き場を失った僕たちが辿り着いた、最後の楽園だった。

1 R E L A N D

ぼんやりとした白い光。

ゆっくりと像を成していく形。

十秒の時間をかけて成した像もまた、ただの白だった。
真っ白い天井。

「おはよう、気分はどうだい？」

知らない男の人の声。

とても優しい声。

今まで僕が聞いたことないくらい。

「んん……………」

僕は声を発しようとするけど、変なうなり声しか出ない。

起きたばかりだ。仕方ない。

自分が発したその声が妙に高かった気がしたけど、
きつとそれも寝起きだからだ。

「無理はしないほうがいい。

君の肉体はとても長い間眠っていたんだ。

なるべく健康な状態に保つよう努めてはいたけど、

なんせ実際の運動はしばらく行っていない肉体だから気をつけて
くれ」

起き上がろうとした僕に男の人はそう言った。

その言葉が何を意味してるのか、僕にはよく分からない。

僕はとても長い間眠ってた？

一体なぜ？

そもそもここはどこなんだろう？

「正直、本当に目覚めるとは思わなかった。

この手で君を目覚めさせた私自身、正直酷く混乱している。色々言っべき言葉は考えていたんだ。

でも駄目だな……

全く、言葉がうまく出てこない」

悲しそうな声。

それでいて嬉しそうな声。

激情と優しさが入り混じった声。

「何から説明したらいいかな」

近づいてくる足音。

不意に視界に影を作る何か。

大きな手。

その大きな手は僕の顔を目指して伸びてくる。

僕は咄嗟に目を硬く閉じる。

その手が僕の額にそっと触れ、僕はビクッと体を震わす。

体温。

僕のそれより暖かい。

その手は僕の前髪を整えるように、ゆっくりと右に流れる。

僕は目をゆっくりと開ける。

メガネをかけた男の人の顔。

多分40代半ばくらい。

男の人の目がきらりと光る。

嬉しさと、悲しさと、僕の知らない多くの感情を含んだ目。雫が僕の頬めがけて落ちてくる。

「本当に、この日が来るとは思わなかった」

男の人はその言葉を言つと同時に俯いてしまう。

僕の額から大きな手が離れていく。

僕の視界のギリギリ隅っこで震えながら泣く中年の男。

僕は多分この人を知らない。

僕も少し混乱してるからはっきりとは分からないけど、でも多分僕はこの人を知らない。

数分の沈黙。

そんなものだと思う。

数えてたわけじゃないけど、多分そのくらい。

僕は何かを言つべきなんだろうか？

多分言つべきなんだろう。

聞くべきことも多分いくつかあるはずだ。

でもその発するべき言葉は一向に出てこない。

僕はいつも何かを言つべき場面で「それ」を言う事が出来ない。

「君にはきつと状況も飲み込めていないだろう。
すまない。

私がきちんと説明をしなければならなくなる……」

力の入らない腹筋に無理やり圧力をかけて搾り出したような声。
多くの感情が混ざり合い過ぎて、それはもはや淡白にすら感じられる。

でも今この部屋の中で、彼以外に状況を推し進められる人間はいない。

彼はその事を知ってる。

だから彼は言葉を搾り出す。

ゆっくり、淡々と。

「君の名前は坂本一樹でいいね？」

この人がなぜ僕の名前を知ってるのかは分からないけど、それは確かに僕の名前だった。

僕はゆっくりとうなづく。

「君にはその名前を今この瞬間捨ててもらわなければならない」

男の人は変わらず淡々とした口調でそう言った。

僕はつい勢いでうなづいてしまいそうになる。

名前を……捨てる……？

「急にこんな事を言われて戸惑うと思う。

けれど今君を見て、君の事を坂本一樹と呼ぶ人間は一人もいないだろう」

この人が何を言ってるのかはよく分からない。

でもなんだか僕は、僕が予想した以上の事態に巻き込まれてるみたいだ。

「それ……は……どういう……」

それはどうということですか？

僕はそう言おうとして、途中で言葉を失ってしまふ。

なんだか声がおかしい。

まるで自分の声じゃないみたいだ。

音程を探るような僕の声は不安の沈黙に飲み込まれて消えた。

そんな僕を数秒見つめ、男の人は再び口を開く。

「君は今日から渡瀬 悠里と言う名前になったんだ」

わたせ……ゆうり……？

寝て、目が覚めたら僕は坂本一樹じゃなくなって、

新しい名前が「わたせ ゆうり」？

「そう、渡瀬 悠里だ」

僕はたまに考えてることを口に出してしまう癖がある。

多分今も名前を口に出して言っちゃったんだろう。

「理解するのは難しいと思う。

君は今この瞬間、元の君とは全く別の人間になってしまったんだよ。といっても、君が君でなくなってしまったのは少しばかり前の事なんだけどね」

僕が僕ではなくなった……？

何を言ってるんだろう……

不意に何かがよぎる。

鉄の棒？

それは視界をかすめた気がしたけど、実際には記憶をよぎっただけだった。

逆さまの鉄塔。

天井から生えた樹木。

どんどん上から下へ流れていく鉄の柱。

さか……さま………？

情景の中で、ふいに僕は頭上を見る。

そこにあつたのは空ではなくコンクリートの地面。
ッ！

僕は勢い任せに上半身を跳ね起こす。

僕の意味じゃない。

恐怖。

僕の肉体は途方もない恐怖に反応し、とつさに筋肉を収縮させた。

「思い出したのかい？」

男の人の声。

僕は顔を声の方向に向けることが出来ない。

ガチガチと音がする。

僕の口の中から。

僕の体は見て取れるほどの震えに覆われていた。

「そう、君はとても高いところから落下した。

とても高い鉄塔の上からね。

そして私の目の前に落ちてきた。

結構すごい音がした気がするけれど、

深い山の中にある鉄塔の周囲に、その音に気づくような人間は当然
いなかった。

まるで肉の塊だった。

関節はあらぬ方向に折れ曲がり、肉は潰れ、皮膚を突き破った骨が
飛び出していた。

とても生きているようには思えなかった。

でもどうだろう。

よく見ると微かに動いてる。

光を失った瞳で、砕けた顎で、

私に何かを訴えかけている。

私は確信した。

私は即座に君を自分の車に乗せ、連れ帰った」

男の人はそこで一旦言葉を区切った。

僕は気づく。

男の呼吸が段々と荒くなっている事に。

その呼吸の音からは紛れも無い狂気を感じ取ることが出来た。

僕の肉体は相変わらず大きく震えるだけで、僕の言う事を聞こうとはしない。

僕はベッドの上で固く目を閉じ、しゃがむような格好で頭を抱え込んでいる。

「私には妻と娘がいたんだ」

再び男の話が始まる。

「娘は16歳になったばかりだった。

酷い事故だった。

妻は即死、娘も助からないと思った。

いや、ある意味では助からなかった、と言っべきかもしれない」

短い沈黙。

「娘の肉体はどうにか一命を取り留めた。」

けれど再び目覚めることは無かった。
そこにあつたのは娘の形をした、空っぽの入れ物だった。
脳死、と医師は私に告げた。

私はその現実を理解し、受け止めようとした。
妻の死に対してそうしたようにね。

二度とあの笑顔を見せてはくれない。
二度とあの声を聞かせてはくれない。
頭で分かつてはいるんだ。

けれどね、あの事故の日、旅行帰りのワゴンの中で幸せそうに眠る娘の顔そのまんまなんだ。

あの日、私が最後に見た安らかな表情のまま、娘は私の目の前で眠り続けていたんだ。
分かつてる。

そこにもう娘の魂はない。
けれど私は延命装置のスイッチを切ることが出来なかった。
ありとあらゆる生命活動を機械に委ねても、
娘の形をしたそれをそこに留めておきたかったんだ」

彼が何を言ってるのか、僕にはうまく理解出来ない。
僕は未だあの恐怖の中にいる。

死への秒読み。
確実な死が近づいてくる足音。
割つても割つても0にはならない。
死までの距離が0・5秒になり、0・25秒になり、0・125秒になる。

0にはならない。
永遠に続く死へのカウントダウン。

顔面に直撃する寸前の地面を覚えてる。

灰色のコンクリート。

その凹凸がゆっくりと鮮明になり、近づいてくる。

「君の肉体はもう助かる状態じゃなかった。」

けれど君は砕けた顎で私に囁きかけた。

助けて、と。

私は魂の無い肉体を保有している。

君は肉体を失った魂で手を伸ばしたんだ。

伸ばした手の先を、死んだ君の瞳は既に捉えていなかったろう。けれど、私にも選択肢はなかった」

ブラックアウト。

僕の意識は再び闇に溶ける。

[illegible]

2 楽園

++++++
++++++

あれから数週間が過ぎた。

僕はどうにか自力で立ち上がれる程度に回復してた。

回復した、という表現は少し違うかも知れない。

この肉体そのものは以前から健康だったんだから。

ただ長い間眠ったままだった肉体だから筋肉は衰えてしまってるし、
関節も思うようには動かない。

リハビリを重ねてようやく立ち上がれるに至ったというところだ。

渡瀬 悠里

それが僕の新しい名前。

渡瀬 友康

それが僕の新しい父親。

きつとんでもない変化なんだけど、

僕にとってそんなものは大した問題じゃなかった。

だって僕はみずから僕自身を捨てたんだから。

そう、あの日、僕は僕を捨てた。

自殺したんだ。

深い山の中にある寂れた鉄塔。

僕はその一番高いところから飛び降りた。

僕は僕を捨て、結果新しい僕になった。
新しい名前、新しい家族、新しい肉体。

僕はあの日、渡瀬 悠里という女の子として生きていく事になった。

正直戸惑いはあった。

ずっと男として生きてきた。

ある日を境に女になっちゃったんだ。

女の子のことなんて何一つ分かんない。

服の事も、体の事も、しゃべりかたも、なんにも。

でも自分を捨てた僕に拒否権は無い。

捨てた僕、拾ったのは狂気の男。

ただの再利用。

新しいお父さんは優しい。

僕が今まで出会った誰よりも。

この肉体は彼の娘のものなんだからそれも当たり前なのかもしれないけれど、

まるで本当に、本当の父親みたいだ。

ふと思う。

僕の本当の家族は今どうしてるんだろう。

僕がいなくなって心配してるかな？

いや、それはさすがにないかな。

みんな、出来損ないの僕を世間に恥じてた。

きつと世間に隠したい僕の存在がなくなってすっきりしてるに違いない。

父さんに至っては僕がいなくなった事に気づいてるかすら怪しい。

でも別に元の家族の事が憎い訳じゃない。

お母さんが言う。

あの家の子はあんなによく出来るのに。

本当にその通りだ。

僕は勉強がびつくりするくらい出来ない。

お父さんが言う。

こんなにトロい奴に育てた覚えはないんだがな。

本当にその通りだ。

僕は運動がびつくりするくらい出来ない。

弟が言う。

お前みたいな暗い奴と話すと暗い菌がうつるから近寄るなよ！

本当にその通りだ。

僕は何度クラス替えを体験してもクラスに馴染めないくらい口下手だ。

僕に出来たのは、ただエヘラヘラとその場をやり過ごす事だけだった。

皆がこんな僕を恥じるのは当然だ。

僕は本当に何一つ満足に出来ない。

がんばっても、どれだけ注意を払っても、

絶対に皆よりワンテンポ遅れる。

自分でもほんと恥ずかしくなる。

だから死ぬ事にした。

皆が隠したい「僕」を、僕は薄暗い山の中に捨てる事にした。
エヘラ笑いを顔の表面に貼り付けたまま。

僕が渡瀬悠里になって初めて自分の足で地面に立った時、新しいお父さんはとても褒めてくれた。

僕が渡瀬悠里になって初めて彼を「お父さん」と呼んだ時、新しいお父さんは涙を流して喜んでくれた。

僕はあのエヘラ笑いを浮かべる。

お父さんは僕を抱きしめてくれる。

初めてだった。

僕のことなすこと、全てを褒めてくれる。

どんくさいのは肉体を取り替えても直らないらしくて、僕は相変わらずどんくさい。

ただとお父さんはやっぱり褒めてくれる。

うまく出来なくても「よくやった」と言ってくれる。

僕のしぐさ、言葉、全てを喜んでくれる。

呂律がうまく回らないのは肉体を取り替えても直らないらしくて、僕は相変わらず言葉っ足らずだ。

ただとお父さんはやっぱり喜んでくれる。

うまくしゃべれなくても、それを「かわいい」と言ってくれる。

僕は相変わらず何一つ満足に出来ない。

新しい肉体を得ても、だ。

ただとお父さんはそんな僕を褒めて、笑顔で僕の頭をなでてくれる。
だから僕は精一杯「悠里」を演じる。

足りない言葉で、不器用な手で、誰からも必要とされなかった全て

3 彼氏

++++++
++++++

始業のチャイムが鳴る。

学校。

僕は17歳の女の子として学校へ行く事になった。

正直最初は戸惑った。

いくらこの肉体は真正銘女の子だと言っても、やっぱり僕は僕のもまだ。

「悠里」を演じるのはそんなに嫌じゃない。

少なくともお父さんはとても喜んでくれる。

人前で自分のことを「私」というのにもちょっとは慣れた。

だけど「外の世界」で僕の微々たる演技力が通用するとはとても思えなかった。

お父さんは僕が「悠里」であるだけで、そこに「悠里」として存在するだけで僕を愛してくれる。

でも皆はそうじゃない。

皆にとっては「僕」も「悠里」も一緒なんだ。

だから怖かった。

僕は元の僕を失う前、学校でいじめられてた。

だからまたいじめられるんじゃないかって、そう思った。

肉体が変わったところで頭が良くなった訳じゃない。

肉体が変わったところで運動神経がよくなった訳じゃない。

肉体が変わったところで、僕の性格が変わった訳じゃない。

僕がかつていじめられた理由の全てを僕は未だ持ち続けてる。

だけど現実には僕の想像してたものとは少し違ったんだ。

相変わらず友達はあるし出来なかった。

やっぱり僕は口下手だし、そもそも女の子の輪になんて入っていけない。

入学した最初は皆僕に話しかけて来てくれたけど、話題もちんぷんかんぷんだし、こういう態度でそこにいればいいのかも分かんない。

次第に僕に話しかける人は少なくなって、やがて0になった。おとなしい僕を気にかけてくれる子はちょっとだけいたけど、でもやっぱり友達と呼べるような人間は出来なかった。

そこまでは僕の予想した通りだった。

でも一つ大きく予想を裏切る事があったんだ。友達は出来なかった。

でも彼氏は出来た。

正直自分でも軽く引いてる。

体は女になっちゃったけどやっぱり僕の心は僕のままだし、男の子に恋したりはさすがにしない。

でもはっきりしない僕の態度は時として僕の心を大きく無視した現実を招く。

「俺、お前、惚れた」

全部単語だった。

僕の言語能力もなかなかだと思ってたけど、上には上がいるんだなあって思った。

突然だったからリアクションの取りようもない。

もとより告白された時のリアクションなんて、今まで考えたことも無かった。

だってそんなものにはホント無縁だったから。

「恋、マジ、芽生えた」

顔が真っ赤だった。

耳まで真っ赤だった。

まるで僕みたいだなって思った。

だからちよつとだけ親近感沸いちゃったんだと思う。

うまく言葉が出なくてちよつと微笑んでみた。

すると彼もサルみたいに二カツと笑ったんだ。

とはいえやっぱりその気持ちを受け取っちゃまずいよなあって思った。

だからちゃんと断ろうと思った。

でもやっぱり僕は僕だったりして、あー、とか、うー、とかしか言えなくて、

で、さらに畳み掛けるように単語の羅列をされた僕に出来ることと言ったら、

とりあえず「んあ」と言う言葉を発することだけだった。

彼の中でその「んあ」は肯定の意味だったらしくて、彼が力強くガッツポーズをしたんだ。

「まじ！？オーケー出ちゃったの！？」

4 タン麺

++++++
++++++

彼はいわゆる不良だった。

ヤンキーとも少し違う、ワルとも少し違う、

不良っていう言葉がホントよく似合う人。

髪は真っ黒だけどぼっさばさだし、

シャツの第一第二ボタンは留めないどころか無くなっちゃってるし、
基本的に廊下は真ん中のラインの上を大股で歩くものだと思うてる
ような人だ。

体格もいい。

「俺、武井 真人！」

思い出したように唐突に彼は名乗った。

あの教室のど真ん中での告白から二週間くらいしてから。

「お前、マジ、腹減ったろ!？」

彼はデートだって言って、よく学校帰りにタン麺屋に連れてってくれる。

お金も出してくれる。

ラーメン屋じゃなくて、タン麺屋。

何故かラーメンも餃子もチャーハンも置いてない。

タン麺だけを売ってるタン麺屋さん。

正直デートっていう響きにはちよっと抵抗ある。

でも武井くんは僕にとってお父さんの次に優しい人だ。
格好とかしぐさはちよつと怖いけど、でも絶対僕に暴力を振るつたりはしない。

多分僕より言葉を知らないんじゃないかってくらい発言の全てが単語ばかりだけど、でも嘘をつかない。

僕は「悠里」としてここにいる。

その事はよく自覚してる。

だけど僕はそれでも多分友達が欲しかったんだと思う。

僕が「僕」だった頃には手にすることが出来なかった「友達」

もしあの頃の僕にそれがいたら僕は僕を手放さないですんだかもしれない。

だからなんとなく武井くんの誘いを断れなかった。

気付いたら学校帰りのタン麺は日課になってた。

「なあ、マジ、ちゅーして!」

「そ、それは……………ごめん……………」

「なあ、ちよつと、聞いてくれ!」

「ん……………」

「なあ、マジ、ちゅーして!」

「い、いや……………だから……………その、ごめん……………」

次第にそんな会話が増えてきて、
だから僕はちゃんと打ち明ける事にしたんだ。
彼の気持ちには答えられない。

でもはじめて出来た友達を無くしたくない。

僕にとって「親友」は漫画やドラマの中だけのもので、だから漫画から飛び出してきたような武井くんには正直憧れてた。男同士の友達として、彼と色んなところに行ったり、色んな事をしたり、

色んな話をしたいと思ったんだ。

「ぼ、僕さ、実は男…なんだよね……」

その瞬間の武井くんの顔をよく覚えてる。

まるで猪木のように顎を突き出し、目をカッと見開いて、網膜が干からびるんじゃないかってくらいに時間硬直してた。若干腰も引けてた。

「お前……マジ……男!？」

「う、うん……マジ……男……」

「ごめん!」

とりあえず謝ってみたりした。

沈黙。

「お、OK……ちょっと……落ち着け!」

武井くんはそう言いながらおもむろに自分のズボンを脱ぎ捨てた。

「え………ちょ、ちょっと武井くん何してるの!？」

「お前……ちよつと……逃げ!!」

「いや……脱げって言われても……そりゃあちよつと……
 っていうか何で武井くんが脱ぐわけ!？」

「か……確認、お前、男？」

そこでやっと武井くんの動きが止まる。
パンツに指がかかっている。

武井くんは硬派なようด้วยブリーフ派らしい。

「い……いや、男っていうか……今は体は女っていうか……でもハートは男っていうか……」

武井くんの顔は相変わらず猪木をキープしたままだ。

「か、体は女だから…脱げないよ……
 っていうか、男だったとしてもここじゃちょっと脱げないよ……」

通りを行く人たちの視線。

「ちよつ、お前ら！！バカッ！！見んな！！」

夕暮れ染まる商店街のど真ん中に武井くんの叫び声が轟いた。

[illegible]

5 風

++++++
++++++

後日、僕は学校帰りの道すがら武井君にイチから説明したけど、武井くんは相変わらずあんな感じで僕の言ってる事が分かってるのか分かってないのかよく分からない。

今でもたまに「なあ、頼む、ちゅーして!!」って言ってくる。

僕はふと考える。

自分の体が女だっていることについて。

僕にとってこの数ヶ月は激動だった。

自分自身を失い、別の肉体を手に入れ、別の人生を手に入れ、そんな中で僕は「自分」についてきちんと考える余裕が無かったんだと思う。

新しい生活に慣れるのは簡単な事じゃない。

今まで僕にとって「当たり前」だった全てが失われ、代わりに別の真新しいものが目の前にずらりと並べられる。

ブラジャーのつけ方、生理の時の対処、長い長い髪の毛の整え方、どれも男だった頃の僕には知る由もないものばかりだ。

こなす事に追われ、こなした直後には別の真新しいものが目の前に差し出される。

お父さんは決して僕を急かしたりはしない。

だから僕は余計に意地になっちゃうっていうか、どうにかして「まとも」にそれらを成そうとしちゃう。

何も急ぐ事は無いとお父さんは言ってくれる。

一つ一つをゆっくり飲み込んでいけばいいと言ってくれる。

失敗しても笑顔で許してくれる。

でも僕がそれをうまく出来た時、お父さんは一際嬉しそうにする。
だから僕は必死だった。

あれから数ヶ月の月日が過ぎて、
やっと僕は今僕の置かれた状況について、ゆっくり考える事が出来る。

僕は服の胸元を摘んで少し広げてみる。

そこには当たり前前のようにならかな山が二つ並んでる。

男だった頃にはなかった”それ”。

僕はそれをじーっと見つめてみる。

とても不思議な形をしてる。

不思議なやわらかさをしてる。

見てるとなんともいえない気分になる。

スカートのジッパーをおろし、

薄くてやわらかい生地のパンツを膝までおろす。

お父さんが僕に与えた部屋。

「悠里」の部屋の角にある大きな鏡。

僕の、「悠里」の下腹部がそこに映し出される。

そこで僕はちよつと申し訳ない気持ちになる。

死んでしまった人の隠された部分を覗くというのは、

まるで悪いことをしてるような気分だ。

でも僕は「悠里」を知らなきゃいけない。

僕は「悠里」になるためにここに連れてこられたんだ。

薄い茂み。

自分の下腹部にあるそれを眺め、
鏡に映し出されたそれを眺め、
また自分の下腹部に視線を戻す。

自分の髪が不意に眼下に垂れる。

僕は半ば無意識にその垂れた髪を手で耳の横にそつと除ける。
とても自然な動作。

この数ヶ月で、いつのまにか当たり前になった動作。

鏡に映し出された自分の顔をじつと見てみる。

鏡の中の僕が「悠里」を見つめる。

鏡の中の「悠里」が僕を見つめる。

手は耳元にかざされたまま。

武井くんについて考える。

この唇に触れたいと言う。

この胸の膨らみに触れたいと言う。

この薄い茂みに自身を埋めたいと言う。

僕だったら、と僕は思う。

僕が武井くんだったら。

僕が「悠里」の彼氏だったら。

きつと同じ事を考える。

僕はこの唇に右手の指を這わす。

僕はこの胸に左手の指を這わす。

この茂みをきつと僕もまた求めるんだろう。

多分、僕が、「悠里」の中身が男だから、とかそう言う事じゃない。武井くんは「いいやつ」だ。とても、とてもいいやつだ。

お父さんが大切に扱ってきた”これ”を、
武井くんが大切に扱ってくれる”これ”を、
きつと僕も大切に扱わなければいけない。

お父さんの声が1階から呼びかける。

[illegible]

+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +

警告の鐘が僕の頭の内側で鳴り続けている。

傾いた天秤が元に戻ろうとするように、
ソファーにつけた窪みが元に戻ろうとするように、
僕達の世界もまた、あるべき形を成そうとする。

それがたとえ、誰の望む未来ではなくとも。

R E L A N D

僕は知っている。

小さな”しみ”。

僕はそれを指で擦って消そうとする。
けれど、擦れば擦るほど引き伸ばされ、存在をより強く主張する”しみ”。

僕は目を逸らす。

僕達は、それから目を逸らす。

気にしなければただの”しみ”さ。
大丈夫。

6 崩壊

++++++
++++++

「殺人及び、死体損壊容疑で逮捕する」

深夜12時の逮捕劇。

僕のお父さん、渡瀬 友康は逮捕された。

パトカー、取調室、白い部屋、パイプ椅子、窓の鉄格子、
僕の覚えてる断片。

屋敷の地下に保存されてた「坂本一樹」の頭部。

僕たちの楽園は一夜にして失われた。

僕は警察に真実を話した。

僕は必死で「お父さん」を助け出そうとした。
だけど「渡瀬悠里」の言葉を誰も信じはしない。
混乱する僕を取り残したまま、時間だけがただ過ぎる。

「お前、これから、どうする？」

武井くんが僕に言った。

「分かんないけど……。
なんか遠くの施設に送られるみたい。
ごめん、もう会えないね……。」

武井くんがじつと僕を見る。

「逃げよう」

多分武井くんの言葉。

もしかしたら僕の言葉。

その辺はよく覚えてない。

夕焼けの歓楽街、

高架橋、

液晶看板、

電柱、

コンビニ、

交差点。

オレンジの中を僕たちは死ぬ気で駆け抜けた。

スカートがぱたぱたとめくれて太ももに当たる。

僕の手を掴む武井くんの大きな手。

はあ、はあ、はあ、はあ、

躓いて転びそうになる。

武井くんが咄嗟に僕を抱きとめる。

僕たちはまた走り出す。

「これから……どうするの?」

「わかんない、約束、守る」

約束……

ある日の帰り道、僕は武井くんに全てを打ち明けた。
元は男の子として生きていた事、
山の中にある鉄塔の頂上から飛び降り自殺した事、
「お父さん」に拾われて「渡瀬悠里」になった事、
全てを話した。

「俺、よく、わからん」

武井くんは相変わらずサルみたいな顔だった。
もじゃもじゃの黒髪をくしゃくしゃと手でこね回す。

「でも」

武井くんと目が合う。

僕はつい目を逸らして俯く。

制服、チェックのスカート、紺のソックス、ローファー、
煉瓦張りの地面、

僕のローファアの対角線上に武井くんのローファー。

「俺、お前、守る」

分かった。

彼がきつとこう言う事を。
だから打ち明けた。

彼は「渡瀬悠里」に恋をしてるんだ。
彼に選択肢は無い。

僕は、卑怯者だ。

.....

「俺、食べ物、盗ってくる。
お前、ここ、隠れてろ」

武井くんが自分のコートを脱いで僕の肩にかける。
秋の夕日はすぐ沈む。
僕たちは真新しい夜の闇の中で、知らない街の影を探し当てた。

武井くんが通りに駆けていく。
僕はしゃがみこんだまま動けない。
女の子の靴は走りづらい。
僕はただ肩で息をする。

逃げる。

何から？

警察？

役所の人？

望まない未来？

下らない現実？

気付けば僕はまたエヘラ笑いを顔に貼り付けてる。

7 残響音

++++++
++++++

どれくらいの時間が経ったんだろう。

僕は浅い眠りに落ちていた。

武井くんはまだ戻ってきてない。

もしかしたら迷ってるのかもしれない。

武井くんは僕に負けないくらいの方角音痴だ。

探しに行こうか悩んだけど、僕も彼に負けないくらいの方角音痴だ。
きつと僕がここを動けば出会える確立はもつと低くなる。

そんなことを考えてた。

「やあ」

男の声。

武井くんじゃない。

「こんなとこで何してんの？」

笑ってる。

薄暗い闇の中で何かが笑ってる。

よく見るとその笑みは複数ある。

「こんなさ、歓楽街の外れのさ、

人気の無い裏路地でかわいい女の子が一人で何してるんですかーって聞いてんの」

別の男が言う。

「あひゃひゃ。あんま怯えさすなよ。
大声出されたら足つくぞ？」

僕は硬直したまま動けない。

「はい、お嬢さん、あんた今から30分声出すの禁止ね」

僕の肩に手が伸びてくる。

僕は咄嗟に身を仰け反らせようとするけど、狭い裏路地では逃げ場は無い。

「うつ……くつ……」

壁に肩を押し付けられる。

僕はつい声を漏らしてしまう。

「声だすなうつってんだろ。」

「テメエ、バレーボールみたいな顔になりたいの？」

「…………ツ」

声のトーンがさっきまでより1オクターブくらい低い。
肩を押さえつける手に力が籠る。
痛い。

「お前そっち抑えろ」

「ほいよっと」

4人の男。

僕の3倍くらい太さがある8本の腕。

あっという間に地面に押し倒されてしまう。

「脱がしちゃう？このままいく？」

「めんどいしこのままでいーべ」

「めんどいとかいっちゃって、お前の趣味じゃね？」

「うっせボケ、テメエ最後だからな」

武井くんは帰ってこない。

僕は武井くんの名前を心の中で叫ぶ。

悠里の体を、僕とお父さんと武井くんは守らなきゃいけない。

ずっと、ずっと皆で守ってきたんだ。

僕たちのしてきたこと、その全てが間違いでも僕たちはそれにすぎるしかなかったんだ。

.....

ばかげてる。

下らないじっこ遊び。

心の奥底では気付いてた。

お父さんも、僕も。

でもそこでしか生きられなかった。

そこでなら僕たちは笑いあう事が出来た。

守らなきゃ、この体を。

「武井くん……たすけ……！！！」

僕は持ちこたう全ての力を腹筋に込めて声を出そうとした。
でも次の瞬間意識を揺さぶるほどの衝撃が僕の頬を貫いた。

「テメエ、声出さなっつたっしょ」

「いつ……や……ッ！」

ゴン。

ぶつ、じゃない。殴る、だ。

意識が遠のきそうなほどの衝撃。

体を這う手に力が込められる。

誰かの手が僕の口をとて強い力で押さえ込む。

「…………ッ！」

僕は必死でうなり声をあげるけれど、喧騒の歓楽街にその小さな唸り声は飲み込まれてしまう。

痛みがやってくる。

下腹部から。

僕は身をよじる。

身をよじればよじるほどそれは絶望的な確信になる。

逃げられない。

裏路地の廃れた匂い。

訳の分からない汚れにただれた地面の感触。

腕を、肩を、足を、頭を押さえつける手の力。

体の内側を貫く痛み。

僕の意識は何度も消滅と覚醒を繰り返す。

点滅する世界。

男の肩越しに、遠くにぼんやり見える小さな光。

僕の体中をもぞもぞと這うがさつな手。

黒い塊。

欲望。

人は誰もそれを胸の内に抱いてる。

現れ方が少し違うだけだ。

僕はその事を知っている。

ずっと前から。

誰かの願いが誰かを不幸にする。

そうだ、だから僕はあの時全てを諦めたんだ。

僕の願いは誰を不幸にしたんだろう？

鉄塔の屋上。

いくつかの考えが頭をよぎる。

ごめん、お父さん、

ごめん、お母さん、

こんな息子でごめん、

大樹、こんなお兄ちゃんでごめん、

みんな、ごめん、

こんな僕でごめん、

ごめん！

あーあ、もういいや。

鉄塔の上。

風。

音。

コンクリートの地面。

衝撃。

熱を失う体。

「その碎けた顎で、助けて、と君は私に囁いた」

ああそっか。

お父さんの本当の人生を、

悠里の魂の本当の在り処を奪ったのは、僕だったんだ。

「おい、こいつ笑ってるよ。

こんなんで感じてんの？

マジ変態じゃね？」

僕の人生はあの鉄塔の下、冷たいコンクリートの上で終わり。

このお話はただの残響音。

ミシリと音を立てる天秤。

でも、居ることが許されたはじめての場所。

「あつはつは、まじ！？感じちゃってんの？」

僕の顔にこびりついたエヘラ笑い。

涙は、もう出ない。

+
+
+ + + +

8 Last Chord

+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + +

武井くんが戻って来たのは彼らが去ったすぐ後だった。

「ごめん…… 武井くんの恋人、守れなかった」

武井くんが手に持ったバッグをどさりと落とす。
表情は見えない。

「やっぱり…… 僕は駄目だった……」

僕はエヘラと笑ってみる。

武井くんが無言で近づいてくる。

武井くんの匂い。

武井くんの体温。

僕を、「悠里」を抱きしめる大きな体。
震えてる。

あの日から傾いた天秤。

「ごめんな、ごめんな……」

それが元に戻っただけのこと。

「ごめんな、一樹……」

夜の歓楽街の廃れた裏路地で、僕たちの物語は終わりを告げた。

そのあと僕は一度だけ武井くんと寝た。
そして、

僕は悠里の肉体を悠里に還した。

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9483c/>

RE-LAND

2010年10月17日01時39分発行